

Ⅲ - 33

ヒト消化管におけるPYYの局在

向井俊一, 小根森礼子, 神原明彦,
岡本一馬, 清水 哲, 岸本真也,
梶山梧朗
(広島大学医学部第一内科)

目的) PPと類似の化学構造をもつPolypeptideYY(PYY)はブタ十二指腸より分離されたが, ヒト全消化管におけるPYYの局在は未だ明確でない。今回我々はヒト消化管及び胆嚢におけるPYYの局在を免疫組織化学的方法により検討した。方法) Julia M, Polakより提供を受けたPYY抗体を用い手術及び生検により採取した食道, 胃, 小腸, 大腸, 胆嚢の健常部位の各組織片をブアン固定し3 μ の組織切片を作製したP-benzoquinoneで固定し10 μ の凍結組織片を作製し各々PAP法, 蛍光抗体法により消化管及び胆嚢におけるPYY様免疫活性(以下PYY-LI)を検索した。各組織片はHE染色を行い正常な組織であることを確認した。結果) 胃体部, 前庭部, 近位小腸にPYY-LIを含有する内分泌細胞を少数認め, さらに遠位小腸, 近位大腸, 直腸を含む遠位大腸に多数のPYY-LI含有細胞を認めた。神経叢内のPYY-LIについては全消化管に認めなかった。胆嚢のPYY-LIに関しては現在検索中である。結論) PYYはヒト消化管粘膜に内分泌細胞あるいは傍分泌細胞として広く分布しておりこの事実はPYYが消化管の機能に密接に関与していることを示唆する。

Ⅲ - 34

胃癌培養細胞株における癌胎児性抗原(CEA)の発現に及ぶ発癌プロモーター及びインヒビターの影響—PAP法による解析

原田孝之, ○稻田健一, 大畑 力,
鳥井郁子, 森川 茂
(島根医大・病理, 同皮膚科)

癌胎児性抗原(CEA)は消化管を中心とした上皮性悪性腫瘍と胎児消化管上皮に発現する抗原であり, 1種の腫瘍マーカーとして注目され臨床応用も進められている。しかし, CEAの発現と癌細胞自身の分化段階及びそれらに影響を与える因子の解析は充分とはいえない。こうした腫瘍マーカーの細胞学的解析には, 形態学的分析が可能な組織化学的手法は有利なものと考えられる。

我々は自家樹立ヒト由来胃癌細胞株中, 腺房形成能を有するGAC-2株と印環細胞の性質を有していたGAC-T株を材料に, 発癌プロモーター, TPAとインヒビター, レチノ酸(Vit-A, RA)のCEA産生に及ぶ影響をPAP法で検索した。同時に形態学的変化も観察した。

TPAはGAC-2株に形態学的な悪性化とともにCEA産生を促した。しかしGAC-T細胞への影響は乏しかった。逆にRAはGAC-2のCEA産生の刺激能は軽度であり, 形態学的な異型性はなく, GAC-TではCEA産生抑制を示した。バイオリジカル・レスポンス・モディファイアーの標的細胞の分化状態との流動的な関連を示唆するものとして興味ある現象である。